

同志社大学設立の旨意(抜粋)

回顧すれば既に二十余年前、幕政の末路、外交切迫して人心動揺するの時に際し、余不肖海外遊学の志を抱き、脱藩して函館に赴き、遂に元治元年6月14日の夜、竊かに国禁を犯し、米国商船に塔し、水夫となりて労役に服する凡そ一年間、漸く米国ボストン府に達したりき、幸にして彼国義侠なる人士の助けを得て、アーモスト大学に入り、続いて又たアンドヴァ神学校に学び、前後十余年の苦学を積み、而して米国文物制度の盛なるを觀、其大人君子に接し、其議論を叩き、茲に於て米国文明の決して一朝偶然にして生じたる者に非ず、必ず由て来る所の者あるを知る、而して其来る所の者、偏へに一国教化の敦きより生ずるを察し、始めて教育の国運の消長に大関係あるを信じ、心竊かに一身を教育の事業に擲んことを決したりき、

明治7年の末、胸中一片の宿志を齎らし、十余年来夢寐の間に髣髴たる我が本国に帰着せり、明治8年11月29日、同志社英学校を設立したり、是れ即ち現今同志社の設立したる創始なり、

其目的とする所は、独り普通の英学を教授するのみならず、其徳性を涵養し、其品行を高尙ならしめ、其精神を正大ならしめんことを勉め、独り技芸才能ある人物を教育するに止まらず、所謂良心を手腕に運用するの人物を出さん事を勉めたりき、而して斯くの如き教育は、決して一方に偏したる智育にて達し得可き者に非ず、唯だ上帝を信じ、真理を愛し、人情を敦くする基督教主義の道德に存することを信じ、基督教主義を以て徳育の基本と為せり、

吾人は政府の手に於て設立したる大学の実に有益なるを疑はず、然れども人民の手に拠って設立する大学の、実に大なる感化を国民に及ぼすことを信ず、其生徒の独自一己の氣象を發揮し、自治自立の人民を養成するに至っては、是れ私立大学特性の長所たるを信ぜずんば非ず、

教育とは人の能力を發達せしむるのみに止まらず、総べての能力を円満に發達せしむることを期せざる可からず、如何に學術技芸に長じたりとも、其人物にして、薄志弱行の人たらば、決して一国の命運を負担す可き人物と云ふ可からず、若し教育の主義にして其正鵠を誤り、一国の青年を導いて、偏僻の模型中に入れ、偏僻の人物を養成するが如き事あらば、是れ実に教育は一国を禍ひする者と謂はざる可からず、

一国を維持するは、決して二三英雄の力に非ず、實に一国を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず、是等の人民は一国の良心とも謂ふ可き人々なり、而して吾人は即ち此の一国の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す、吾人が目的とする所実に斯くの如し、諺に曰く、一年の謀ごとは穀を植ゆるに在り、十年の謀ごとは木を植ゆるに在り、百年の謀ごとは人を植ゆるに在りと、蓋し我が大学設立の如きは、實に一国百年の大計よりして止む可からざる事業なり、

吾人が宿志實に斯くの如し、其志す所を以て之れを我身に顧れば、恰も斧を磨して針を造るの事に類する者なきに非ず、余の如きは實に力微にして学淺く、我が国家の爲めに力を竭すと公言するも、内聊か愧る所無きに非ず、然れども二十年来の宿志は、黙して止む可きに非ず、我邦の時務は黙して止む可きに非ず、又た知己朋友の翼賛は黙して止む可きに非ず、故に今日の時勢と境遇とに励まされ、一身の不肖をも打忘れ、余が畢生の志願たる、此の一大事業たる、大学設立の爲めに、一身を挙げて当らんとす、願くは皇天吾人が志を好し、願くは世上の君子吾人が志を助け、吾人が志を成就するを得せしめよ、

明治21年11月

同志社大学發起人

新 島 襄